

知覚と同時性

——ベルクソン『物質と記憶』の一側面——

岡嶋 隆佑（慶應義塾大学）

ベルクソンの知覚論に頻出する、ある異常な視覚経験の分析を行う。対象となるのは、次のようなテキストである。「[...] われわれは対象そのものの内に入り込み、対象を、われわれの内ではなく、それ自身の内で、知覚している [...]」（MM41）。ベルクソンはこれを「常識の素朴な確信」と呼んでいるのだが、率直に言って、これがわれわれの通常の（あるいは正常な）経験だということには無理があるだろう。自分の身体がある場所（「ここ」）から見ると対象は「そこ」にある、というだけの話ならわかる。が、述べられているのは、まさしく知覚がなされる場所そのものが身体の外だ、ということだからである。このような異常知覚はいかにして可能となっているのか。本発表では、この問いへの応答を通じて、ベルクソンの知覚論の一射程を明らかにしたい*1。

議論構成は以下を予定している。

（1）まずは、上述の特殊な視覚経験の内実を確認する。関連箇所を網羅的にみていくが、ベルクソン自身はこの経験に説明を与えているというよりは自明のものとして語っているように思われる。そこで、文学や病理学における同様の経験の記述を参照軸とすることで、他分野との問題の共有を図りつつ、主題となる経験に可能な限り具体的なイメージを与えておきたい。

（2）次いで、ベルクソンの知覚論の概念布置を概観する。『物質と記憶』の枠組みにおける具体的な経験が、知覚・感情・記憶（perception, affection, mémoire）の混合から成ることは周知の通りである。このうち、心身問題に直結する記憶と知覚の関係が扱われることは多いが、知覚と感情の相互連関は、あまり表立って論じられてこなかったように思われる。後者について、可能的行為の反射という機能の観点から整理することで予備的考察としたい。

（3）その上で、上述の問いに対し、本発表はおおよそ以下のような応答を行う予定である：（a）われわれの通常の視覚経験において、知覚と感情の二つのシステムは、首尾よく組み合わせられた状態で機能している。だが、感覚・運動的な平衡に障害が生じると、その程度に応じて、二つのシステムが独立して機能し始めるようになる。両者が完全に分離したとき、感情を含まない——がしかし記憶（縮約）を含むという意味で——「準・純粹知覚」とでもいったような状態が生じる。これが、冒頭の引用にみられるような異常知覚の正体である。（b）このような知覚が「ここ」（身体のある場所）からの眺めでありながら「そこ」（対象の内）に定位されるという事態が異常に思われるのは、正常な視覚においては、これとは別の「ここ」と「そこ」の経験が与えられているからである。すなわち、感情によって、知覚される空間の各点に、行為に相関的な時間感覚（身体からより遠くにある物に対して行動するにはより長い時間がかかる）がいわば重ね書きされる（cf. MM29）。したがって逆に、感情が除外されると、時間的隔たりが消失し、知覚者は、「ここ」と「そこ」に、文字通り同時に居合わせることができるようになるのである。

以上の議論は主に『物質と記憶』のテキストに依拠して進められるが、知覚概念が必ずしも日常的な自己中心性を含意しない、ということが理解されれば、それを前提とする多くの知覚理論に対して問題を提起することになると考えている。

*1. 本発表は、杉山直樹氏の講演「直観哲学を再考する——現象学の前のベルクソン」（2014年6月22日、上智大学哲学学会大会）の二つの主題、「今」と「ここ」のうち、後者について発表者なりの応答を試みるものである。